山林開墾が中断したままで地肌露出
がけ上住宅に迫る危険放置

穴川橋から柏台小に抜ける市道沿いの斜面が開発途中で工事が止まったままなのは、危険ではないかと本紙に相談が寄せられた。現地に訪れてみると、市道に迫る高台にはマンションや住宅が立ち並んでいた。その下の20メートルほどの高さがある急な斜面には大木が生えていたほどで、開発される以前は山林の様相を呈していた土地であった。

現在は、大木は切り倒され、たくさんの切り株が残っており、灌木や雑草などは除去されたものの、斜面が途中まで止まっていることから、地肌があらわになっていて、建築資材らしきものが放置されている。現場は誰が見ても一目でがけ崩れの状態を感じるほどの状態である。

柏台小学校近くの市道沿い

中央区内に本店のある開発会社は土地の所有権を取得後、開発に着手している。この会社は不動産業にするなどの対応が求められている。

崖上の住民は「同意書に印鑑がほしいと言われたが工事を中止するという説明は受けていない」「斜面が崩れるとは思わないが絶対崩れないとも言えず不安だ」と語る。また、現場は柏台小学校の近くであることから、近隣の保護者の間でも危険な場所として度々、話題にあがっている。

待たれる市の対応

熱海市で大規模な土石流が発生して以降、たくさんの危険性が指摘されたことは記憶に新しい。今回の現場は、より住宅地を走る交通量の多い、通学路にもなっている幹線道路に面した急な斜面で、その開発が途中で放置されていることには驚きしかない。

大雨や大雨に見舞われると高台から一気に大量の水が流れ落ちると予想され、地肌があらわになっているだけに斜面の土がえぐり取られ、道路に流れ込むことは明らかである。

現場を管轄する土木事務所は「実際に流出防止対策を明確にするなどの対応が求められている。

崖上の住民は「同意書に印鑑がほしいと言われたが工事を中止するという説明は受けていない」「斜面が崩れるとは思わないが絶対崩れないとも言えず不安だ」と語る。また、現場は柏台小学校の近くであることから、近隣の保護者の間でも危険な場所として度々、話題にあがっている。

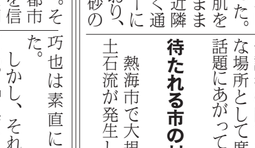
待たれる市の対応

熱海市で大規模な土石流が発生して以来、全国で盛土やがけの一斉点検が行われたことは記憶に新しい。今回の現場は、より住宅地を走る交通量の多い、通学路にもなっている幹線道路に面した急な斜面で、その開発が途中で放置されていることには驚きしかない。

大雨や大雨に見舞われると高台から一気に大量の水が流れ落ちると予想され、地肌があらわになっているだけに斜面の土がえぐり取られ、道路に流れ込むことは明らかである。

現場を管轄する土木事務所は「実際に道路に土砂が流れ込むか、その危険性がはっきりしない限り、土木事務所の所管業務としては業者の指導に乗り出すなどの対応はできない。本庁案件だ」と回答した。そして市役所本庁の開発を所管する部署は事実を把握しておらず、本紙の問い合わせで急遽、現地調査に取り掛かった。この業者は一帯の土地を取得する際、市から赤道（周囲と一体化して認定できない昔あった公の道）の払い下げを受けているから、市が知らないこと自体が考えにくいと事業関係者は話す。

斜面が崩壊するだけなら道路が通れなくなるだけで済むが、がけ上の住宅まで崩落すると大惨事となり、市に重大な責任が及びかねない。市は事業者の情報を明らかにできないから本紙はこの業者の開発に関する許認可の手続を確認できていない。市の適切な対応が求められている。



千葉市の埋立地に着目した冊子
待望の第2号『週刊埋立地』刊行！

昨年12月、千葉市の埋立地をテーマとしたコンテンツを集めた冊子「週刊埋立地」が発行された。

この冊子は、一昨年、市民団体「ちば文化センター」の構成メンバーが千葉市の市制100周年を独自の観点で盛り上げようと製作した冊子「月刊埋立地」に続いて発行されたもの。

出版費用は千葉市内の企業や店舗、個人からの協賛により集められている。昭和時代の専門誌を イメージして制作されているため第1号には「月刊」、第2号には「週刊」とついているが月刊誌や週刊誌ではないという。

冊子の内容は千葉市の湾岸沿い、主にJR京葉線沿線の検証するんだ」

「へえ、ナオちゃんが歌うんですか」

巧也は驚いて、マスターとナオちゃんを交互に見た。「なんか、すごく意外」

人前で歌うようなタイプとは思わなかった、そう言うと、今度はマスターがギョッとした顔をする。

「……ちょっと待て、巧也君。キミ、まさか知らなかったのか」

「え？」

「ナオちゃんはもともとプロの歌手だぞ。十代の頃はアイドルで、テレビにもよく出てたんだが……」

巧也はコップを口に近づけた格好のまま凝固した。口はあんぐりと開き、目はこぼれ落ちそうなほど見開かれている。

その姿をチラッと見たナオちゃんがフッと笑った。

「私がアイドルやってた頃、この人まだ幼稚園とかでしょ。知るわけないよ」

マスターの奥さんの兄弟の娘。それがナオちゃんなのだそうだ。もはや親族と言っていいのか判断に迷う薄いつながりだが、ナオちゃんは芸能界を引退した後、親類が経営している店だからという理由で『メディウス』を頼ったらしい。詳しくは聞いていないが、実家に戻れない事情があるのだという。

ちなみに10年アルバイトの待遇で満足しているのは、「アイドル時代に一生働かなくてもいいくらい稼いだから、趣味でバイトしてるんだ」とマスターは言う。そんな出来の悪い都市伝説のような話を信じるほど巧也は世間知らずではない。

だ、趣味という部分には少し共感した。

たぶん、ナオちゃんにとっては音楽がいい。

『メディウス』での ライブは、しっかり聞かせてもらった。アコースティックギターを抱えて、のびやかな歌声を響かせるナオちゃんは、すごくカッコよかった。

感染症対策のため15席はばびっかし設けていなかったことが残念に思えた。

「コロナになる前は、立ち見も入れて50人以上のお客さんが来たんだよ。来年はそれくらい世の中が復活しているといいねぇ」

マスターの言葉に、巧也は素直に頷いた。

しかし、それにしても、『メディウス』はもの凄い宝物をバイトで雇っているんだな。便利ではないが立地といい、なのに繁盛していることといい、不思議な店だと巧也は首を捻るしかない。

ナオちゃんの謎が解けた代わりに、今度は『メディウス』自体が謎の魔宮めいて見えてきてしまうのだった。

完

著者　草野くれよん
千葉市の稲毛生まれ稲毛育ち。稲毛在住。筋金入りの稲毛者。好きなパンはマロンド。好きな芸能人はマツコ・デラックス。好きなお菓子は万祝餅（まいわいもち）。愛読書は稲毛新聞。

新連載　ローカル小説
「喫茶店の人」
後編　草野くれよん

1月号の続き

ある週末、用事を済ませた後、巧也は少し遅めのお昼にしようと『メディウス』に寄った。ピークを過ぎているせいか、客の姿はなく、カウンターの中でマスターが暇そうにしていた。

「おう、巧也君、いらっしゃい」

ナオちゃんはホームカウンターの端で、いつものように背中を丸めて頬杖をつき、スポーツ新聞を読んでいたが、ふと顔を上げた。巧也と目が合うと、小さく頷いて立ち上がる。お冷やのコップを巧也の前に置き、「ランチのカレーは終わり」と低い声で囁いた。

「そ、そうですか」

「今日はやたらとカレーが出る日でさ、あっという間になくなっちゃったんだ」

マスターが頭を振りながら説明した。

「まぁ、今日は早仕舞いだからちょうどよかったかもな」

「早仕舞い？」

「外に貼ってあるポスター、見なかった？　今夜はライブだよ。機材を入れたり客席を作ったりの準備があるから喫茶店は三時で閉店」

「ライブ……って、誰がライブやるんです

家電家具レンタル会社の中古販売専門店
SOKO＋
SOKO+ 千葉店
千葉市稲毛区小仲台4-14-14
営業時間10:00～18:00
定休日※火曜・水曜・年末年始
JR稲毛駅東口より車で6分、徒歩17分

田舎暮らし
賃貸で気軽に始められる
南国リゾートライフ
プランコスタ白浜　1DK
賃料 4万7,000円（税込・管理費／8,900円）
敷金／礼金■1ヶ月／なし　構造／SRC　階建／階■13階建て3階　間取り■1DK　専有面積■27.18㎡
築年数■築38年（1985年6月）所在地■千葉県南房総市白浜町白浜　交通■JR内房線館山駅徒歩161分　駐車場無料
■ペット応相談　■給湯基本料／月2,000円　住宅保険要加入　■入居者プール利用可・野島崎灯台側景観　取引態様／仲介
みつみね不動産　館山支店　☎ 0470-22-8611
〒294-0036 千葉県館山市館山1055（株式会社三峯商事　不動産部）千葉県知事免許（4）第15180号

モノレールストーリー
モノレールの中のプロポーズ

吉成庸子

花みずきの花がみずきは大好きだ。

みずきを育ててくれた祖母が「あなたの名前ネ、みずきがお腹にいるうちから、女の子だったら、みずきという名にするの」といつも母が言っていたと教えてくれたからだ。だけどみずきは母を知らない。みずきが生まれるとすぐにこの家を出て行ってしまったそうだ。

みずきは千葉市内にある街の片隅で生まれそこで育った。父の家は代々農業で暮らしをたてている。祖父母、父母、父の妹三人と大家族だったが、家族みんなが仲良しで、まあ大農家といえた。

みずきの母は東京生まれの東京育ち。両方を知っている方の紹介で二人は見合い結婚をしたという。農作業は一切手伝わなくて良いからと言われて嫁いできたものの、そうはいかない。小姑も三人いるし、みずきの母にはつらい日々だったようだ。

みずきが生まれ一ケ月たった頃、母は家を出て行ったと聞かされている。父の母である祖母は気持ちの広い人で、みずきを本当に可愛がってくれた。父は後妻さんをもらったので、みずきには母ちがいの弟と妹が出来た。

やがて、父の妹達も皆結婚し、いなくなった。二度目の母は、人のよさそうな人だったが自分の子供の世話に夢中で、みずきには余り関心を示さない。その分祖母が一心に可愛がってくれた。

みずきが高校を卒業してまもなく、嫁に欲しいという話が起きた。

相手はとなり町一、二番の大農家の長男。東京の大学へ行き二、三年勤めていたが、現在は帰って来て父親を手伝っている。農業にたずさわる他にアパート等をつくり、ちょっとした田舎の青年実業家みたいな存在らしい。

結婚するならみずきさんがいいと彼が強く希望しているのでと、お仲人さんは何度もみずきの家に来た。

「結婚なんてまだ早いよ」と言いはるみずきに祖母が「望まれたうちに行く方が女は幸せ。それにはあちゃんだってそう長くは生きとらん。みずきの花嫁姿早く見せとくれ」と何度か言った。

祖父も他界しておしまえばこの家は少し居づらくなるのはわかっていた。結局、みずきは結婚したのだった。

夫となった良一は優しい人で、大切にしてくれたが忙しいうち、良一は、「妹達がうるさい奴でごめんな。でももう少しのがまんだからな。来年中には三人共結婚してこの家からでて行くからさ」と話しだした。

「えっ三人共、結婚するの？」おどろくみずきに「ウン三人共だ。我が家の平和のためにゃ大分あちこちたのんだりもしたけど」と、良一が笑顔で説明してくれる。

みずきは、ほっと胸の中に温かいものが生まれてきた気がした。この人はいい人だ。これから先ずっと、この人といい家庭を作っていかねばと、みずきは本気で思った。

三人の娘が一度に嫁ぐとなると、さすがにいのに…と言ってかうるさい奴でごめんな。でもいま、まんだからな。来年中には三人共結婚してこの家からでて行くからさ」と話しだした。

「えっ三人共、結婚するの？」おどろくみずきに「ウン三人共だ。我が家の平和のためにゃ大分あちこちたのんだりもしたけど」と、良一が笑顔で説明してくれる。

みずきは、ほっと胸の中に温かいものが生まれてきた気がした。この人はいい人だ。これから先ずっと、この人といい家庭を作っていかねばと、みずきは本気で思った。

三人の娘が一度に嫁ぐとなると、さすがに家全体が忙しくなった。そうなると多くなり目を移し、少し下の方まで眺めると、美しい花を付けた何本かの木が目の中に飛び込んでくる。

「あれが花みずきだよ。きれいな花だろ」

良一が教えてくれた。

「そうゆ、あれが花みずきなのね。私初めて見たわ」

みずきのこの言葉にうなずきながら良一が「僕大学三年の時だったかな？ほら高校で何十周年の記念行事があっただろ。あの時初めてみずきを見たんだよ。なんて可愛いいんだろうとじっと見ていたんだ。そして絶対あの娘と結婚すると決めたんだ」と言った。

「それ本当の話？それなら私スゴク嬉しい」。素直にみずきがめてでごらん」窓の外に目を移した。

「僕大学三年の時だったかな？ほら高校で何十周年の記念行事があっただろ。あの時初めてみずきを見たんだよ。なんて可愛いいんだろうとじっと見ていたんだ。そして絶対あの娘と結婚すると決めたんだ」と言った。

「それ本当の話？それなら私スゴク嬉しい」。素直にみずきがそう口にすると「ねえ、みずき、僕一度も正式にプロポーズの言葉言ってないだろう。今ここでプロポーズしていいかな？」

良一の言葉に「えっモノレールの中で？」

「満開の花みずきを眺めながら、走るモノレールの中でのプロポーズ、ちょっといいだろ…」。みずきは、笑顔で答えていた。

そして心の中でまだ見ぬ母へ「母さん、私も好きな人と一緒になれて幸せだよ」と告げていた。

母が結婚前から好きな人がいて、その人が病気になったのを知り、その人の許へ行ったことを、みずきは村の人達の噂話で知っていたから。

随筆
思い出　正月

吉成庸子

前の晩、紅白歌合戦を観てから、ゆくりらもずっと居眠りしてた。そして儀ちゃんと二人でおそばを食べたのだ。儀ちゃんは、みそかそばは、除夜の鐘を聞きながら食べるのが我が家のしきたりだと言うから、その通りにしている。

私は、食べ終わったそばのどんぶり等片付けてから一お父さん、そろそろ私、寝るね」と告げた。「もう寝るのかの？」儀ちゃんの言葉に「だっていいよ。私だけお先に寝るから。そうそう年くる年を観ていてじゃない。だかいかもしれないけど…」。

「何ぃ？　俺が居眠りしてたって？　バカ言え、俺は目をつむっていただけだ」。

論してきた。

文句言ってやりたいと思うものの、言い合いになるのはわかっている。だから、そうそう私、寝るね」と言ってしまった。

翌日はいかにも元旦らしい明るい日差しが窓から差し込んでいた。そろそろ起きなきゃと私が思った時だ。儀ちゃんが部屋に入ってきた。

そして、いきなり私の足をスゴイ勢いでけとばした。そして大声で「正月早々、亭主より遅くまで寝て

いる女房がどこにいる、起きろ起きろ」と言う。

見ると儀ちゃんは正月用の和服を着た。ウール地で地色は黒だけだ。いろんな花がたくさん描かれている派手なゆったりしたワンピースだ。

「おだやかな正月だなあ」儀ちゃんが私に言った。「ホントだね、お父さん、今年も仲良くしていこうね」。

私はやさしい声で言った。

「そりゃ、無理だ。俺は耐えて耐えての一年に決まっている」

「かわいそうに。そんなに仕事が忙しいの？」同情した私は少し優しく聞いた。儀ちゃんがいきなり叫ん

庭へおりて行った。

私は急いで歯みがき、洗顔をしてから、新しい部屋着を着た。ウール地で地色は黒だけだ。いろんな花がたくさん描かれている派手なゆったりしたワンピースだ。

「おだやかな正月だなあ」儀ちゃんが私に言った。「ホントだね、お父さん、今年も仲良くしていこうね」。

私はやさしい声で言った。

「そりゃ、無理だ。俺は耐えて耐えての一年に決まっている」

「かわいそうに。そんなに仕事が忙しいの？」同情した私は少し優しく聞いた。儀ちゃんがいきなり叫んだ。「仕事は順調だし、苦労はない。お母さんが俺の苦労の種ということさ」だって。カッとする私。グッと我慢して「お父さんお年玉は」と言った。

私は右手を出した。ふところから、大きなのし袋を出して私にくれた。「大奮発したんだ。大切に使えよ」。

儀ちゃんが護国神社に出かけた後、お年玉の入ったのし袋を開けた。一万円入っていた。こんなお正月の風景もあったなあと一人思い出している。お年玉もう少し多いと期待してたんだけどさ。

なえる、それから、おいなりさんにも。お母さんが俺の苦労の種ということさ」だって。カッとする私。グッと我慢して「お父さんお年玉は」と言った。

私は右手を出した。ふところから、大きなのし袋を出して私にくれた。「大奮発したんだ。大切に使えよ」。

儀ちゃんが護国神社に出かけた後、お年玉の入ったのし袋を開けた。一万円入っていた。こんなお正月の風景もあったなあと一人思い出している。お年玉もう少し多いと期待してたんだけどさ。

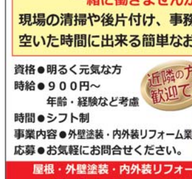
住まい工房おぬまの「お困りごと お助けデー」が9年振りに復活！

暮らしの中でちょっとした困りごと、例えば「電球が切れちゃったけど交換できない…」や「ガタガタしていた扉が開かない」、「お湯がでない…」。どんな些細なことでも解決してくれるのが9年振りに復活する住まい工房おぬまの「お困りごとお助けデー」。以前は顧客を中心にちょっとした住まいのお困りごとに駆けつけ解決してきた。稲毛で住まいの困りごと、修理、修繕からリフォームまで地域密着で歩んできた住まい工房おぬまが、27年目を迎えるにあたり再びお助けデーで地域の役に立ちたいと考え、気持ちを高ぶらせ、2月11日の土曜日を皮切りに定期的に開催。リフォームの会社であっても、お住いのことだけではなく、地域の困りごと、暮らしやすい生活を提案してくれる。

●有料千円～4千円（詳細はお問合せ）

0120-811-606

㈲住まい工房おぬま



スタッフ募集
一緒に働きませんか。
現場の清掃や後片付け、事務補助など空いた時間に出来る簡単なお仕事です。
近隣の方歓迎です
資格●明るく元気な方
時給●900円～
年齢・経験など考慮
時間●シフト制
事業内容●外壁塗装・内外装リフォーム業
応募●お気軽にお問合せください。
屋根・外壁塗装・内外装リフォーム専門店
株式会社　四葉建装
TEL.043-488-5671
〒284-0043 四街道市めいわ2-6-10

1964年創業
今も昔も変わらないのは
お客様とのふれあいです
これからも私たちは地域の
お客様の笑顔と共に
成長し続けられるよう
努力いたします。
株式会社 オオクシ
http://www.ohkushi.co.jp

★信頼の証
千葉県弁護士協同組合特約店
ひとりで悩まないで
浮気調査
お客様体験談
秘密厳守
基本料金33,000円（経費別途）
一都七県弁護士協同組合特約店
ご相談無料
0120-487-870
【千葉本社】
株式会社 愛晃リサーチ（アイコウ）
千葉市中央区中央2-8-5 ジュピタービル8階

次回発行日　3月3日（金）

身近な情報はメール・FAXでお寄せください